

新しいコレクション

エミール・ガレ

《イチジク文聖杯》



エミール・ガレ (1846-1904)
《イチジク文聖杯》

1898年
被せガラス、宙吹き、脚部の熔着、
金属酸化物挿入、マルケトリー、
手彫り、熔着、金箔挿入
高57.8、径19.7cm
GI0166
平成29年度 阿部信博氏寄贈
撮影：エス・アンド・ティフォト

緑

色を帯びたガラスに、枝葉を広げるイチジクの木が幻想的に浮かび上がっています。器のかたちは、キリスト教のミサで使われるカリス（ミサ聖祭においてぶどう酒を奉納し、聖別、拝領するとき使用する杯）を模していることから、作品の背景に何らかの宗教的な意味合いが潜んでいることがうかがわれます。さらに、杯を支える脚の付け根部分には、大きな滴がしたたれ落ちています。ひとつは、作品に使われているのと同色のガラスでもうひとつは鈍い赤色です。

フランス北東部ロレーヌ地方の中心都市ナンシーを拠点に活躍したガラス工芸家エミール・ガレは、植物に自身の思想を託し、世紀末象徴主義を体现する作品を多数残しました。植物に象徴性を持たせるのみに飽き足らず、作品にはしばしば銘文が刻まれました。こうした強いメッセージ性ゆえに、ガレの作品は、「もの言うガラス」として知られることとなります。本作の地表近くにも、ヴィクトル・ユゴーの詩の1節から引用された次のような刻銘があります。「人はみな同じ父親「神」から生まれました。人の子だから 同じ眼からこぼれ落ちた涙なのだから」。

この作品を構想していた頃、ガレは、フランスの世論を二分した冤罪事件、ドレフュス事件に関わり、一八九八年には、「人間と市民の権利」同盟ナンシー支部設

立委員兼会計主任となつて、アルザス生まれのユダヤ人陸軍大尉アルフレッド・ドレフュスの擁護に身を投じていました。その中で迎えた一九〇〇年のパリ万国博覧会に、ガレは、自社の家具工房で作った陳列棚ふたつと、煉瓦積みみのガラス炉を出品しました。樹木をかたどった巨大な棚の中には、森林の植物を装飾的にあしらった器を並べました。陳列棚は、『孤独の憩い』と名付けられ、「わが根源は、森の奥にあり」というガレの制作信条が凝縮されたものとなっていました。一方、ガラス炉のブーには、象徴主義の小説家マルセル・シュオップの『七つの壺』に感化され制作された花瓶が展示され、その小説のタイトルがブー名となっていました。そのブーに掲げられた看板には、ギリシャの詩人ヘシオドスの次のような警句がありました。「だがもし、すべての人が邪悪で、偽善的で、怠慢であるなら／私に悪しきデモンの火を投げかけよ／花器も碎けよ！／窯も崩れよ！／すべての人の正義を实践する術を学ぶために」。そして本作のヴァリアントが旗印のように、ブーの屋根根の上にと際高く展示されたのです。本作には、宗教の違いを超えて、軍国主義、不正、不平等に対抗する近代人ガレの生き方そのものが、色濃く反映されています。

(工芸課主任研究員 北村仁美)